



吉野川の河口デルタに位置する徳島市は、吉野川の分派川である新町川や助任川など多くの河川が網の目のように流れる「水の都」です。なかでも新町川と助任川は、徳島城址、徳島市役所、J R 徳島駅などのある中心市街地を取り囲むように流れ、まちの歴史とともに歩んで来た河川と言うことが出来ます。

蜂須賀家政による16世紀終わりの徳島築城以降、徳島は城下町として発展しましたが、それを支えたのは吉野川流域における藍の栽培でした。新町川の両岸には藍倉が建ち並び、舟運が盛んに行われていました。

しかし、明治時代の終わり頃になると藍産業は安価なインド藍や化学染料



新町川と藍倉（昭和初期）



水上喫茶（昭和30年代）

の輸入の影響を受けて衰退し、水上交通の衰えと相まって、新町川周辺はその賑わいを失っていきました。藍倉も昭和のはじめにはすべて取り壊されてしまいました。

昭和36（1961）年の第二室戸台風による水害を契機として新町川にはパラペット護岸が整備され、人と川とのつながりが希薄になってしまいました。また、昭和初期までは水泳が出来るほど清浄であった新町川の水質は、昭和40年代には家庭や工場からの雑排水の増加により急速に悪化しました。昭和45（1970）年にはBODが30mg/lを超え、ヘドロの堆積や硫化水素の発生による悪臭など、魚の棲めないドブ川となってしまいました。

新町川の水質改善をはかるため、徳島県や徳島市では排水の規制や下水道の整備を行うとともに、昭和46（1971）年度からは川底に堆積した汚泥の浚渫、昭和55（1980）年度か





新町川と徳島市街地（手前より、新町川、助任川、吉野川）

らは吉野川本川から新町川への浄化用水の導入を実施しました。このような水質改善の取り組みにより、平成21（2009）年度の水質は2 mg/l程度にまで改善されています。

昭和62（1987）年度には新町川を含む徳島市内河川網が「ふるさとの川モデル事業」の指定を受け、まちづくりと一体となった河川整備が進められました。さらに、平成4（1992）年には徳島市が「ひょうたん島・水と緑の

ネットワーク構想」を策定し、河川沿いのプロムナード整備や公園の親水化などに取り組み、徳島県では平成11（1999）年度から新町川沿いにライトアップした遊歩道の整備を行いました。この県と市、河川事業と公園事業、港湾事業など行政間の連携により、新町川水際公園（平成元（1989）年完成）やしんまちボードウォーク（平成9（1997）年完成）が整備されていきました。新町川においてこのような水辺の公園・緑地の整備が進められた背景には、戦災復興計画のなかで新町川沿いにベルト状の公園を設けることを計画していた先人の功績を見逃すことは出来ません。

また、地元市民や商店街も水辺の再生に熱心に取り組みました。平成2（1990）年に発足した「新町川を守る会」はボートによる新町川の清掃活動や「ひょうたん島周遊船」の運行、緑化・修景活動など様々なイベントを開催し、活動の輪を広げています。一方、ボードウォークの整備は地元の東船場商店街振興組合が中小企業事業団の融資を受けて行ったものであり、いまでは洒落たレストランやブティックが川に顔を向けて並び、休日には「しんまち・まちづくりユニオン」が運営するパラソルショップが河畔に連なるなど、市民や観光客の集いの場となっています。

「新町川水際公園」の整備、「しんまちボードウォーク」の整備、「新町川を守る会」の活動に対しては、それぞれ手作り郷土賞が授賞されています。また、「しんまちボードウォーク」は平成15（2003）年度の「美しいまちなみ優秀賞」に輝いています。

徳島市では昭和61（1986）年に「徳島市水と緑の基金」、徳島県では平成3（1991）年に「徳島県うるおいのある水辺づくり基金」をそれぞれ創設し、その運用益を河川環境と都市緑化事業、啓発活動、河川愛護団体への支援などにあててきましたが、その運用益は減少の一途をたどっています。今後は行政と市民とのいっそうの連携による効率的な運営とともに、新町川の水辺空間の魅力をさらに引き出すための試みが求められています。



水上ステージ



しんまちボードウォークとパラソルショップ